

2025年度 第1回研修会レポート

「本当の想いを引き出し実現する～私たちが目指す意思決定支援」というテーマで企画した2025年度の第1回研修会は、国立オリンピック記念青少年総合センターセンター棟402研修室に都内外から77人の参加者が集まり、盛況のうちに開催することが出来ました。都通研の運営委員も15人が参加しました。



午前中は2つの講義を聴講しました。まず、『ほんとには知らない利用者さんの気持ち～相談支援専門員の意思決定支援～』と題した中川邦仁丈氏（相談支援センターポピー）の講義では、意思決定支援を考えるにあたって、利用者理解に必要な障害特性や特徴などを踏まえた支援上のポイントや、ABA（応用行動分析）などによる根拠に基づいた適切なアセスメントを踏まえて、日頃の様々な場面

でどう対応していくか、実践事例を交えて相談支援の立場からお話しいただきました。成育歴の中で選択の機会が少ない障害当事者の方に選択を促す際には、障害特性も踏まえ、同一性保持に十分留意したかたちで本質的な選択となるような提示の仕方が必要であることも強調されました。また、利用者本人に関わる情報は本人が発する言葉だけではなく、その方に関わる全てが情報であることやブラッドショーのニーズ論や内発的動機付けの観点の重要性も分かりやすく解説くださいました。

次に、吉田隆俊氏（グループホームみらい）から、『思いを大切にする支援～それぞれの物語を共に創る～』というテーマで講義いただきました。ご自分の青年期の体験から得た「障害があるから不幸ではない。福祉はそれぞれの幸せを応援する仕事」であるという考えをベースに現場の動画を幾つも盛り込んだ迫力ある実践論でした。障害当事者本人の豊かな暮らしを支えるために、ご自分をはじめチームの支援員が思い描いていることと、実際の利用者が持っている可能性に関して、医療的ケアの



必要な重症心身障害者の実践事例をもとにお伝えいただき、看護師の視点からの多職種連携の大切さもお話しいただきました。吉田氏らが実際に行ってきた、利用者ご本人の想いを真ん中に据えたチーム支援のありようを形にした『自分新聞』制作の取り組みの紹介もありました。多数持参された実物を参加者皆で見入りながら、意思決定支援における「本人の物語を本人と支援者が一緒に創っていく」ことの大切さを学ぶことが出来ました。



午後に入り、実践報告では、加藤恵子氏（相談支援センターレガール）より『「本当の願い」探しに寄り添う旅～病への向き合い方や暮らしの在り方に関する意思決定・形成のための意欲形成支援～』というテーマで相談支援での事例を、山田貴雄氏（杉並区下井草カラフルホーム）より『多様性の価値が変わる。外国からの仲間と共に築く、柔軟な意思決定支援について』というテーマでグループホームでの事例を報告いただきました。



それぞれに利用者とのコミュニケーションや日中活動、暮らしの場のあり方を創意工夫、試行錯誤しながら利用者の想いをどう実現しているのか、そのプロセスを具体的にお話しいただきました。外国人労働者をチームに迎えたことによる支援のメリットも発表していただきました。



シンポジウム（『日頃の意思決定支援に関して』）では、講義、実践報告をしていただいた4名に再度ご登壇いただきました。講義と実践報告直後のアンケートによる参加者の意見も踏まえ、中川氏の司会のもと、多職種連携の大切さや参加者の質問・疑問を交えながら、活気あるシンポジウムとなりました。「シンポジウム、とても面白く話に引き込まれてしまいました」との意見も参加者の方からいただきました。



個人ワーク、グループワークでは、ワークシートを使用し、「本日の研修での気づき」や「実際に起こりそうな仮想事例に対してどのように対応するか」などを5～6名のグループで共有しました。「時間が足りない」との意見も出るほど、各グループで様々な意見が出ていました。自分とは違う考えや意見など「気づき」を共有しました。



「意思決定支援」では、どのように支援したら良いか、私たちに難しさを感じさせます。今回の研修では、様々なお話を聞き、仲間と意見交換する中で、一人ひとり、場面場面で異なる利用者の意思に対して、どのようにサポートをすれば良いか、私たち支援員にとって、どのような考え方、スタンスで日々の支援にあたれば良いか、たくさんの気づきが得られる研修となりました。講師、パネリストの皆様、お忙しい中ご登壇いただき、誠にありがとうございました。参加者の皆様、暑い中ご参集いただき大変お疲れ様でした。



（担当：小久保）